



靴底を叩く金槌や、刻印用のコテ、ギザギザ模様をつけるための道具など、どれも靴づくりに欠かせないものばかり。また、他ではなかなかお目にかかれないマニア垂涎の貴重な革も揃えている



前の店の客から注文を受けてつくった靴。よくよく見ないと分からないが、靴先に小さなキズがついてしまったためボツになったもの。「手は技かない」のは当然だが、決して容易ではない、職人としての気概に惚れ惚れする



一から自らの手で造り上げた店舗は、ガラス越しに作業をする森氏が見える。靴々と靴を磨く姿が信頼を生むのか、様子をうかがい、足を踏み入れる通りすがりの客も少なくない。存在感のある革ののれんが目印

京 KYOTIAN I.D.

京のおきばりさん

靴修理職人

森 裕佑

MORI YUSUKE

【プロフィール】

’80年大阪生まれ。思春期を香川で過ごし、大学進学を機に京都へ移住。その後、神戸の会社に就職し、靴づくりに携わる。退社後、専門の教室にて指導を受け、再就職。3年後独立し、’07年2月、三条商店街にて「真摯靴」の店主となる

職人の手で生まれ変わる 紳士靴ならぬ「真摯靴」

学生時代、陸上ばかり「がっつりやりました」。モノづくりには無縁の生活だった。けれど、就職活動をはじめると、高校生のころをふと思い出す。革でプレスや財布などの小物をつくっていたのを。革製品で思い当たったのが靴。靴と言えば神戸・長田。決めたから素早く、神戸に移住し、婦人靴をつくる会社で働き始める。だが、「ピンヒールはつきりつくて、イヤになってきて(笑)」。もっと本格的に靴づくりを学びたいと思い、1年間教室に通う。再度、就職活動。「靴を」つくってるところはどこもヤバイと感じてう？と。町に一軒は必ずあるので、タウンページの上から順に電話して個人商店を探しをしたんです。会ってくれることになった会社で、開口一番「独立したいので働かせてください」と頼んだ。願いは聞き届けられ、3年間修理の技術を身に叩き込んだ。そうして、満を持しての独立。「京都は修理屋が少ない」という理由から、学生時代を過ごした街へと戻ってきたのだ。

物件を探していたので、当初夢見た街中からは少し外れるが、この地に店を構えることになった。店名は「真摯(りんか)」。雑誌で目にした『漂(りんか)』という文言に惹かれてつけた名。それは、穏やかなのに漂々しい空気を持つ森氏に相応しい。

修理に対する妥協のなき、靴づくりでの大らかさ。彼の手にかければ、どんな靴でも新品のとき以上に美しく生まれ変わる。丁寧に修理を重ね、愛着を抱いて履き続ける。「シュッとした靴も格好いいけど、本来靴は足を守るためのもの。細かくなく、気楽に履けるものが好き」というだけあって、タイプはイギリス製。中でもトリッカーズの靴が好みだ。

「修理はあくまでも人の輝で相撲をとるようなもの。ちゃんとしてないと、と思う。自分の靴をつくる時は適当ですよ(笑)。たまに自分の好きな靴をつくる、のんびりやりたい。午前中は(マウンテンバイクで)山へ行って、午後からは仕事するよ。食えればいいです(笑)。とはいえず、彼の汚れた指先や、きちんと手入れされている道具、磨かれた靴たちからは、ひしひしと愛が感じられる。靴への真摯な愛が、」

information

真摯靴

〒075-821-2605
京都市中京区三条通大宮西入ル
●10:00~20:00/木休(不定休の場合あり)
ピンリフト630円、サイズ調整525円、フラスナー交換3675円、トップリフト1890円、メリーソール1890円~など